

本校の生物生産科果樹班が育てたナシ苗木の地元生産者への引き渡しの記事が、朝日新聞に掲載されましたので紹介します。

## 高校生 農家へナシの苗木



ナシの苗木引き渡し式で、薩摩中央高校の生徒たちとともに約30本の苗木を手にする生産農家の藤田さん(左端)＝さつま町虎居

### さつま新たな栽培法で「産学連携」

栽培の難しいナシの生産拡大に向けて、県立薩摩中央高校(さつま町)の生徒たちが育てた苗木を低価格で地元の生産者に提供する試みが進んでいる。県内で導入が進む新しい栽培法の大きな課題だった苗づくりを「産学連携」で克服して大きな果実につなげたいという。5月27日には第1陣となる苗木50本が農家に渡された。

## 薩摩中央高 実習で育て安価で

苗を並べて植え、接ぎ木した枝が一直線になる「ジョイント仕立て」や収穫作業が効率化できるといってさつま町中津川



ナシと言えは鳥取がイメージされるが、農林水産省がまとめた出荷量(2014年)をみると、全国のトップ3は千葉、茨城、栃木の各県で、鹿児島県は高温多湿の気候や収穫期の台風被害もあり、全国44位にとどまる。さつま町は県内では霧島市に次いで生産が盛

んだが、農家は「さつま町ナシ振興会」(藤田俊郎会長)の10戸しかない。ナシは実るまでに時間がかかる果樹。「モモ・クリ3年、カキ8年」のことわざの続きで「ナシの馬鹿めが18年」などとされ、その表現は映画「時をかける少女」(1983年)の挿入歌にも登場する。実際、ナシ栽培はこれまで幹から3本の主枝を放射状に広げる樹形で行われてきたが、剪定に高度な技術が求められるなど、規模拡大が難しかった。

2012年に神奈川県農業技術センターが特許登録した「ジョイント仕立て栽培」が登場。直線上に植えた苗の1本だけ伸ばした枝の先端を隣の苗の枝に接ぎ木し、何本もの枝を一行につないで、実がなる枝を左右の網棚に広げていく栽培法だ。収量が安定するまでの期間が大幅に短縮され、剪定や収穫などの作業効率もアップするため全国に普及しつつある。

高齢化や後継者難で栽培

農家が減っている県内でも15年に「鹿児島ジョイント仕立て研究会」が発足した。しかし、この栽培法で使う苗木は、枝の形を整える必要があるなど、ナシ園の管理に追われる農家にとっては大きな負担となっていた。そうした中、農家の相談を受けた町農政課が薩摩中央高に協力を求め、生物生産科の生徒たちが実習の一環で苗づくりに取り組むことになったという。18年末に植えられた小さな苗木は約3年に成長。生徒たちは通常は2年かかるところを実験や工夫を重ねて1年半ほどで育てあげたという。27日にあった苗の引き渡し式で、生物生産科3年の市山晴菜さん(17)は「今後も苗木を農家の皆さまにお届けできるように後輩に引き継ぎたい」と語り、この苗木でジョイント仕立て栽培に初めて挑む藤田会長は「育てる手間を考えると大変助かる。気をつけて大切に育てたい」と話していた。

(城戸康秀)